

## 9 5 中日及び第6回全国複合材料界面科学討論会に参加して（中国、黄山市）

理学部基礎化学科 柴崎芳夫

筑波大学の古沢邦夫教授にさそわれて、昨年(1995年8月)に中国の黄山市で開催された複合材料界面科学討論会に参加してきました。ここは上海から南西の方向に飛行機で1時間ほどのところにあり、雲海に浮かぶ奇岩と青松の美しさで有名な黄山の麓の古い街、屯溪（とんけい）を中心にした歴史の古い市です。中国観光の名所のひとつですから飛行場が作られており、上海、南京、北京、合肥、西安、武漢、広州、深圳、厦門、福州、杭州などの主要都市と航空路で結ばれています。屯溪の中心街にデパートがひとつありますが、そのわきの泥路を100メートルほど西にむかって歩くと古い門があって、その中は老街（ラオジェ、ろうがい）と呼ばれ、15世紀の明時代の建物が軒をつらねる商店街です。討論会場は屯溪の中心街のデパートの筋向かいにある屯溪飯店の会議室です。屯溪飯店はホテルと呼べる唯一のホテルで、空調設備があるので助かりました。とわいえ、空調設備が壊れて暑くて眠れない部屋、調節が出来ないで冷え過ぎで風邪を引いてしまう部屋などがあり、体調をよく保つのに苦労しました。中国全土から集まった先生方と日本から参加した我々が、ひとつのホテルに缶詰状態で討論会をやるということでした。市街地の古い建物は屋根飾りと塀の上のかざり付けに特徴があり、通訳兼案内人の南京理工大学の田（でん）教授の説明では、回教の影響が強く残っているそうです。多分、モンゴル人が宋を攻めて漢民族を支配したとき、あるいは絹または茶の交易に伴って、回教徒が増えたのでしょうか。漢民族を中心としながらも多種の少数民族が融合して、明国や清国のような強大な国家が成立し栄えたのでしょうか。とにかくスケールの大きな国だな感心させられました。

会議の議題は、複合材料とその界面科学的な問題に関連したもので、高分子化学、界面化学、コロイド分散系、セラミックスなどの専門家が参集しました。既に、1985、1987、1990、1991、1993年に九江、南寧、南京、天津、茂名で開催され、今回の黄山市の討論会は第6回に当たります。中国側の世話役は南京理工大学の吉法祥（きちほうしょう）教授で、日本側のまとめ役は筑波大の古沢邦夫教授です。なお、ケイ素を中心とした有機化学の研究で世界的に有名な筑波大の安藤亘教授夫妻も参加しました。8月19日の午前に石上（物質化学研究所）さんの招待講演“New Types of Surfactants and the Development of Functions”があり、続いて大学院の入試のために早く帰国しなければならなくなった古沢先生が“Synthetic Process to Control the Total Size Component Distribution of Multi-layer Magnetic Composite Particles”について発表しました。19日午後は私が“Formation of Thin Films of Comb-like Polymers Containing Fluorocarbon Chains in the Side Chains by the LB and Liftup Methods”について発表し、今野紀二郎教授（東理大工）の講演“Synthetic Process to Control the Total Size and Component Distribution of Multi-layer Magnetic Composite Particles”、及び安藤亘教授（筑波大）の講演“Organosilacycles for Silicon-based Polymers”と続いて、第1日目は終わりました。20日は寺島浩教授（筑波大物理工学系）の講演“Adsorption of Bovine Serum Albumin onto Mica Surfaces”、松村英男博士（電総研）の講演“Ion-selective Liposomes Bearing a Binding Selectivity of 18-Crown-6”の講演、植田美紀（筑波大修士2年、古沢研）さんの発表“Colloid Chemical Studies on Stability of Coal-Water-Mixture”と続いて、日本から出席した先生方の発表は全て終了しました。発表は大学院生の植田さんが一番上手であったというのが英会話に堪能な安藤夫人の講評でした。午前中いっぱい中国の先生方の発表を聞き、質疑応答の様子を見学しました。中国語の発表はOHPの図から大体のことは分かりましたが、質疑応答は全く分かりませんでした。ただ、女性の研究者でも自説を強く主張し、激しく応答してお

り、中国の化学の発展は女性研究者の寄与に大きく依存しているなど感じました。この会議で発表された論文の内71報は南京大学学報(J.Nanjing Univ., Natural Sci., Ed., Vol.31, Special Issue, (1995) pp.1~349)に掲載されています。

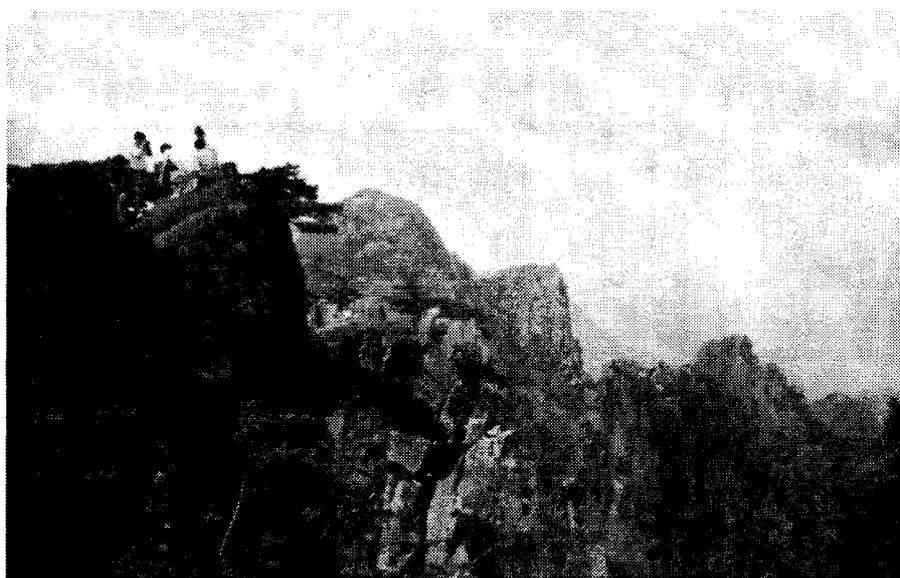
第2日(8月20日)の午後は、屯溪の市街でも特に有名な老街に買い物に出掛けました。老街は、馬頭檐という軒をもち、小さな黒い瓦を乗せた、白壁の美しい家がびっしり並んだ、全長1.5 kmの南宋時代から続く商店街です。目が利けば、晋代から明代までの墨跡や硯などをはじめ、価値の高そうな骨董品がごろごろと店に飾ってあり、十分に楽しめます。思わず財布の中身と定価表の価格とを比較し、やっぱりやめておこうということが何回もありました。特に、古い硯は今でも頭に浮かんで来ます。案内は南京理工大学の田先生と吉先生のお嬢さんです。日本語が達者な田先生は、必ず買いたいかどうかを確認したのち、お店の担当者(公務員)と猛烈な値切り交渉をし、その結果一番多いときは半額近くまで値引きさせました。私たちは田先生に大いに感謝しながら買い物を楽しむことができました。珍しい土産物として推薦できるのは、上質の緑茶を束ねて菊の花のような形(小型の亀の子たわしとも見える)にしたお茶と孟宗竹の根本を利用して人の顔を彫った柱掛けです。根は髭または髪の毛として使い、節は顔のしわと見立てて仙人の顔など彫っていました。当時話題になっていた“やせる石鹸”は、界面化学者が多数参加している日本人によって、デパートの売り場から全部買い占められたのは申すまでもありません。第3日は、市街地の中の路地を歩き、“程氏三宅”などの市内の旧跡や名所を見物しました。狭いながら路地は石で舗装されており、入り口には魔よけの正月飾りが大切に張り付けてあり、庶民の生活は、数百年間変化がないように見えるほど、平穏でした。ところが、帰った後に近所の71歳の人に話したところ、陸軍歩兵二等卒として従軍して黄山の近くを行軍しているとき、歩きながら眠ってしまい、落ちこぼれて迷子になり、中国人農家にたのんで2~3カ月働らかせてもらったのち、目出度く原隊に復帰したんだそうです。したがって日本軍が屯溪にも駐留したわけで、屯溪の市街がよく壊れなかったものだと思います。しかしながら、古いレンガ造りの民家で老朽の著しいものは壊して、鉄筋コンクリートの2~3階建てのアパートや店舗に建て直していました。建築途中の柱や梁をみると鉄筋は細くコンクリートは泡だしが不十分で、地震国である日本の規格からみれば“粗製乱造”と言うべき粗悪な建物でありました。上海や西安ほどでないにしても、長い歴史をもつ中国が少しずつ近代化している様子がよくわかりました。

討論会が無事に終わりましたので、第4日は日本人と中国の大部分の先生方は黄山に登ることになりました。早朝、バスでロープウェイの乗り口、雲谷寺、まで行き、白鵝嶺(約1500 m)に登りました。案内役の先生以外の中国の先生方は途中の登山口から徒歩で登りました。ロープウェイの乗り場は、外国人と中国人とで厳重に分けられており、料金も違います。我々の方が圧倒的に早く着くと思ったのですが、混んでいてなかなかロープウェイに乗れませんでしたので、白鵝嶺で30~40分待った程度でした。予期したことですがホテル以外ではトイレには弱りました。黄山は大峰36、小峰36の合計72峰からなり、その中でも蓮華(1,860m)・光明(1,840m)・天都(1,810m)が三大主峰で、雲の上に壮大な山峰の姿が墨絵のように眺められるのが有名です。古くから、一松、二石、三雲海を黄山の三奇というそうです。切り立った絶壁に松が生えて元気に緑の枝を伸ばしているのは不思議に思えます。水は雲が直接運んでくるのでしょうか。20分ぐらい歩いては休憩し、景色を眺め、持参したパンやお菓子を食べ、写真を撮りました。吉先生がもって来た梨を食べさせてくれましたが、とてもおいしかったです。それまでは腹をこわすといけなかったので、おいしそうな果物を露店で売っていても我慢して食べないでいたのですから一層おいしかったです。宿泊は北海賓館でした。排雲亭から夕日を見るというので山道を歩くうちに夕立にあい、残念ながら北海賓館にもどって中国のビールで乾杯し、中華料理をたっぷり食べました。ここで食べ物についても一寸ふれておきます。黄山市の味付けは上海より濃く、食材はタウナギ、蛙、家鴨、鶏、烏骨鶏(ウコッケイ)、豚など豊富で、新鮮な野菜と煮込んだものが多かったです。討論会が開催された屯溪飯店の料理が田舎料理だという中国の先生方の注文で、途中でコックさんを取り替えたそうです。私にとっては、どれも美味しくて優劣を付けることはできませんでした。ただ、帰途に訪問した南京大学で御馳走になった料理は飛び切り美味しかったです。南京大学

では1年間に2千人近い外国人訪問者があるので、一流のコックを雇っており、市内の高級レストラン並の料理が食べられるのだそうです。さて、話を元に戻します。黄山の日の出は清涼台から見ると素晴らしいというので、北海賓館の客や近くの宿泊所の客が4時ころから北海賓の前に集まって来て、懐中電灯を頼りに清涼台にむけて行列をつくって登りました。結局、雲が立ち込めており御来光は見えませんでした。黄山をよく知るには歩くことであるというので、男性は全員歩いて下山することになりましたが、霧が濃くて何も見えないので、中年を過ぎた我々は光明頂を経由して再びロープウエーで帰ることになりました。私たちは夕日も日の出も見えなかったのですが、黄山を自分の足で歩き、岩肌をなぞ、清冷な空気を吸い、十分に楽しみました。ちなみに、黄山風景区域内は室外では喫煙厳禁です。杖、水筒、乾燥食糧、雨具は必ず持参しましょう。私たちは鉄道で南京にでて、南京大学と南京理工大学を訪問して、南京理工大学の国際交流会館に泊めてもらいました。また、自動車による市内観光など大変にお世話になりました。南京理工大学と筑波大学は安藤先生の骨折りで学術交流協定を結んでおり、教官や学生の交流に実績をあげています。学長主催の晩餐会など、安藤先生のお陰で御馳走になり、とてもよい思い出になりました。



屯溪飯店の会議場にて



黄山の展望